

■ 活動記録 ■

◆ 研究活動 ◆

2012年度先端社会研究所共同研究プロジェクト

公募研究の研究計画

関西学院大学先端社会研究所では、2012年度から2014年度までの3年間にわたって、「アジアにおける公共社会論の構想」というテーマのもとで、①南アジア／インド班、②中国国境域／雲南班、③日本班による指定共同研究プロジェクトを実施する。5月28日～6月12日にかけて関連する研究を行う研究者を対象に公募研究者を募集した。応募のあった研究計画を審査の結果、計2件の公募研究が採択された。以下、採択された研究計画を掲載する。

◆戦争をめぐる女性の歴史的エージェンシーに関する比較研究

ー第二次世界大戦期における日本人女性と中国人女性の表象ー

代表者：Timothy Tsu（関西学院大学国際学部教授）

川端 浩平（関西学院大学先端社会研究所専任研究員）

本プロジェクトの主な目的は以下の二つである。①第一の目的は、第二次世界大戦期における女性の役割を比較研究によって明らかにすることにある。日本と中国における戦後の語りにおいて、女性たちは夫の戦死や個人的な性的被害や搾取に苦しめられた受動的な被害者として描かれてきた。彼女たちは、そのような逆境における困難を辛抱強く耐え抜いたとともに、母親的な役割を果たした功労者として、人びとに記憶されている。いわば、大きなリスクと犠牲を代償にし、負傷者を癒し、弱者を支援し、最終的に取り戻された希望と平和の象徴として位置づけられてきた。しかし、これらの女性と戦争の関係を描き出す歴史的な観点は限定的かつイデオロギー的である。そこで本プロジェクトは、女性たちが兵士・偵察者・スパイ・労働者・ボランティア等々として戦争へ積極的に加担した側面と既存の「戦争被害者としての女性」イメージとを付け合わせることによって、女性と戦闘（fighting）というテーマをバランス良く描き出すことを試みる。このような試みを通じて、総力戦に信念を持って加担した無数の女性たちの意識と行動の歴史的エージェンシーを回復することが目指される。

②第二の目的は、第二次世界大戦期の女性をめぐる現代的な文化表象に関する考察である。映像・文学・絵画・写真等は、戦時における被害者としての女性の規範的役割のイメージ構築を促してきた。これらの表象を「自然」なものとして受容するのではなく、戦争をめぐるより大きな言説を肯定するために描かれたシナリオとして批判的に考察する必要がある。よって、そのようなシナリオを通じて構築された女性のイメージが、勝利と敗北、侵略と抵抗、死と希望、抑圧と反逆、性暴力と名誉等といった、戦争をめぐる規範的な解釈と結びつけられて一般社会に広がっていったこと

が問われる。

本プロジェクトにおいては、比較という視点が重要なものとなってくる。日本と中国において構築された戦後のシナリオを検討し、両国の女性たちの歴史的エージェンシーの回復が内包することの比較を通じて、現代社会における戦争をめぐる文化表象の手法とその特徴を明らかにすることが可能となる。もういっぽうで、日本と中国における戦争をめぐる女性イメージの対照性を検証することは、批判的かつ二国間における戦争の意味をめぐって継続する論争をめぐる理解が深めることになる。

なお、本プロジェクトで扱う広範囲に及ぶテーマをより効果的に検討するために、NIODの研究者を中心とした学内外の研究者との協働体制のもとで研究調査を遂行していく。

◆基地とエロス

－排除と包摂の戦後日本映画研究－

塚田 幸光（関西学院大学法学部教授）

本研究は敗戦後の占領政策から米軍基地問題に至るアメリカの影と、そこに生起する「性」の政治学を、フィルムを中心に考察する。

戦後日本と米軍。この奇妙な関係、そしてその排除と包摂の政治学は、戦後の日本が体験した苦闘の軌跡であり、ダークサイドに他ならない。この闇を如何に捉え、歴史の中に位置づけるのか。或いは、そこに何を見て、現代へと接続するのか。戦後研究とは、敗戦のイデオロギーやナショナリズムと同義であり、困難さの別名であろう。だからこそ、充実した戦後史研究が生起し、我々はそれを参照枠とすることができる。しかしながら、その豊穡な戦後史研究に対し、映像・映画研究は、お世辞にも多いとは言えない。

戦後に関する映像研究は、社会学と政治思想史の枠組みで語られることが多い。平野共余子『天皇と接吻』（1998）や福間良明『「敗戦」のメディア史』（2006）などは、映像とナショナリズム研究を交差させた好例だろう（ここに岩本憲児編『占領下の映画』（2009）を加えてもよい）。だが、上記の研究のターゲットはあくまで占領期とナショナリズムであり、ポスト戦後（米軍基地）の問題にまでは接続しない。如何に「基地／軍」の影を捉えるか。この問い対しては、占領期から現在に至る思考、そしてATG（日本アート・シアター・ギルド）やロマンポルノを包摂する視座が不可欠なのだ。「性」と「軍」表象の研究は、ロマンポルノの領域では無視されているに等しい。

フィルムを通じて、戦後史を見る。本研究の主眼は、米軍／基地表象と、そこに表出する「性」表象の交差を軸に、映像だからこそ可能な「もう一つの」戦後史を再考することにある。具体的には、ストリップショーの隆盛と共に、性の商品化が加速した1940年代後半の「パンパン映画」（日本文学であれば「肉体文学」）、特に『肉体の門』（マキノ正博・小崎政房監督）や『夜の女たち』（溝口健二監督）などの娼婦を巡る敗戦の文化史と映画との関係を辿る。「娼婦」とは、社会が排除し、同時に必要悪として包摂した象徴的存在ではなかったか。この戦後の「性」の風景は、GHQの検閲を得て、米軍不在の風景となる。だがこの後、安保闘争を経た日本の風景には、基地という米軍の姿が色濃く映るようになる。1971年から開始される一連の「日活ロマンポルノ」が好例だ

ろう。占領から安保、そして基地問題へ。「性」と「軍」の関係は如何に切り結び、日本の風景となるのか。両者の交差から出てくる性／政治学、そして公共社会論の問題を考察する。